

令和8年度 刈谷市 共存・協働のまちづくり推進委員会

第1回まちづくり部会 記録

日 時	令和8年8月20日（木） 14：00～15：30
会 場	刈谷市役所503会議室
出席者	委員：近藤義夫、佐野恵子、塚本裕章、大野裕史、米山裕美、久保田富士子、丹羽雅彦 （欠席者：吉川真由美） 刈谷市：神谷課長、酒田課長補佐兼地域支援係長、遠藤協働推進係長、前川主事 ボランタリーネイバース：三島、遠山 *オブザーバー 学生インターン2名
議 題	1 まちづくりコーディネーターの活動状況について 2 共存・協働による地域活動の活性化に向けた検討

● 定刻となり、市民協働課協働推進係長が開会を宣し、以下近藤部会長による進行に移った。

1. 部会長あいさつ

令和8年熊本地震被災地支援で12日から15日に八代市で活動した。家屋の片づけ、子ども食堂等への物資お届け、かき氷配布等を行った。支援を円滑に届けるには、避難所や防災センターの整備だけでなく、地域で必要物資を受け渡しできる拠点や関係性を日頃からつくることが重要。お寺などの身近な場所に物資を置いて必要な人が取りに来られる仕組みなど、公助だけでなく、共助・自助による小さな助け合いの仕組みや関係づくりが大切である。部会でも、平時から小さな単位で人がつながる視点を持ち意見交換ができればと考えている。

2. 議題

1. まちづくりコーディネーターの活動状況について【資料1-1～1-3】

（1）活動報告

これまでに実施された活動について、事務局より説明した。（当日配布資料参照）

- ・現在 35 名のまちづくりコーディネーター（以下、まちコ）が活躍し、うち 10 名が昨年度の「つなぎの学び舎」を受講して登録した新人まちコである。
- ・ファンドレポートは、完成したものを市ホームページに掲載し団体の事業 PR に役立て、まちコは取材を通してネットワークを広げる機会としている。今回の派遣は 2 名が担当し、うち 1 名は新人のまちコが担当した。
- ・自治連合会長勉強会参加者のアンケート結果では、23 自治会中 6 自治会からまちコ派遣に対して前向きな回答があったが、具体的な活用段階には至っていない。
- ・ファシリテーター派遣として、ワールド・スマイル・ガーデンツ木、一ツ木福祉委員会座談会に協力した。福祉委員会座談会への派遣は、昨年度から継続しており、今年度も複数回派遣予定である。

（2）まちコ交流会

第1回交流会当日の様子について、事務局より説明した。（当日配布資料参照）

- ・「チャレンジフェスタやってみん」にて企画・運営に協力した中学生 3 名も参加し、幅広い世代で活発な意見交換が行われた。
- ・第2回交流会は令和9年1月16日（土）開催予定。

（3）つなぎの学び舎

第1回講座の様子について、事務局より説明した。（当日配布資料参照）

- ・参加者は 19 名、まちコ 11 名（うち新人 1 名）、一般 9 名。前回部会にて福祉事業者が参加するとよいとご提案をうけて声かけをした結果、2 名の参加につながった。

【令和7年度活動報告①「チャレンジフェスタやってみりん」に関わった大野委員からの補足説明】

まちづくりの取組の一つである学生向けまちづくり部にむけた活動の一環として実施した。当初行った講座形式の参加者はゼロだったため、企画段階から地元の中学生を巻き込む方針に変更。公募で集まった6名を中心に、総勢約50名（中学生ボランティア30名、地区20名程度）体制で運営し、延べ700名が参加した。刈谷西部自治会のイベントとして、市制施行75周年の補助金を活用。参加生徒からは継続の希望があった。他地区においても、地区が費用を負担し、中学生が運営するモデルの展開を検討している。重原地区にて実施予定の他、半城土地区でも進められている。大人になったらまちづくりに関心を寄せてもらえるのではと期待している。

■説明を受け、以下のとおり意見交換をした。

部会長：「やってみりん」に参加した中学生は、ボランティアに興味があったのか。

委員：活動経験は多くはなかったと思う。部活や塾で忙しいため、打合せの都度次回の日程を決めていた。

委員：子ども同士は知り合いだったか。

委員：東中学区からの応募が多かったが、友達同士の参加ではなく、個々での申込だった。みんな優秀だった。

部会長：学校ごとに広報への対応に違いはあったか。

委員：直接子どもに声をかけてくれたところと、配架で協力してくれたところとに違いはあった。

委員：今どきの児童生徒は、楽しいことや毎年続く行事はイメージがしやすいため取り組みやすいが、実態が分からないことへの不安は大きい子が多い。一方で、参加して盛り上がりたいと思う子どもも多いと思う。東中学区である日高小では「ひだかこフェス」というイベントで毎回ボランティアを募集しており、今回参加した子どもたちは、ボランティアの経験があり、不安が少ないタイプだったと思われる。学校でも、教員の指示ではなく子どものアイデアをもとに企画することを意識しているが、今回は校外で実現できた点が大きい。自分たちの行動範囲を離れて達成できた経験は、子どもにも保護者にもありがたく、またやってみたいと思うのではないか。

部会長：ワールド・スマイル・ガーデンツツ木等に参加された感想は。

委員：ワールド・スマイル・ガーデンツツ木には3年ほど関わっており、自走できる状態に近づいている。南中や雁が音中、刈谷北高校国際探究科の生徒が、外国籍の方と畑作業に参加し、作業日には40～50名が集まる。団体の成長とともに、中学生一人ひとりの活躍も見受けられる。

委員：北部地区の商店街の発展会に関わる中で、子どもたちと地域のつながりが希薄になっていると感じる。子どもたちは意欲があっても慎重で、正解がないことには尻込みしがち。今回の子どもたちは好奇心が勝り、達成感を得られたのだと思う。経験を重ね、活動のイメージができれば参加につながるため、その差を埋めるためのしかけが必要である。子ども会がなくなり地域に出る機会が減る中、地域で何かに取り組み、成し遂げるサイクルを経験することは意義がある。また先程の「やってみりん」について、イベント終了後に作成されたレポートも有益で、親が見ると子どもの成長を感じるだろう。

委員：6名の中学生にはレポートを10部ずつ渡し、親や友人等に自らの経験を共有するよう話をした。

2. 共存・協働による地域活動の活性化に向けた検討【資料2】

内容詳細について事務局より説明した。（当日配布資料参照）

説明の後、「小垣江西高根を明るく元気にする会」の事例から見えてくる共存・協働で取り組みそうなこと、他地区へ展開できる汎用性の高い部分について、部会員から感想やご意見をいただいた。

■説明を受け、以下のとおり意見交換をした。

【自由に使える居場所、地域の大人と子どもが交わる場】

部会長：小さな単位の活動が重要であることと共に、それが班や組単位の親睦で終わらず、「地域猫」のようにテーマがあると、会が発展する可能性があるのだと感じた。

委員：地域で子どもを育てるという視点に立てば、年配の方や親世代も関わるができる。ラジオ体操を通年で行うグループに子どもの参加を受け入れてもらったり、防犯パトロール隊が幼稚園活動を手伝ったりする例もある。声をかけることで広がり、子どもも大人も楽しめるやり方を探していけるとよい。

委員：刈谷市生涯学習課より、「なごみんはあと」事業を受託実施している。中高生の居場所づくり事業である一方、愛教大生の授業の一貫として活動場所にもなっており、大人としては中高生にも大学生にもそれぞれに価値を感じてもらうことに一生懸命で、世代間交流まで考えが及びにくい状態。今の学生はコロナ禍により修学旅行や文化祭等ができず社会的な経験値が少ない分、小さな経験でもとても喜んでくれるが、昭和のやり方では通じず、難しく感じている。

部会長：富士松総合スポーツクラブでは、愛教大生が指導者として携わっている。謝礼は多くないが、教職に就く前に子どもたちと関わる実践経験となり、学生との win-win の関係ができています。

委員：勉強する場所が少なく、塾までの時間を「なごみんはあと」の居場所で過ごす子どももいる。子どもたちは忙しく、イベントをするにしても日を決めて集まることは難しいため、一定期間を設け、いつでも参加できる形にするとうりやすい。また、居場所づくりに参加する大人たちは、市内企業に多い IT 専門職の方に仕事をしながら駐在していただいたり、プラモデルなどの趣味を持つ方に利用していただいたりして、大人が子どもたちとともに過ごす場所づくりに関わってもらえるとよいと思っている。

委員：子どもたちに「遊びに来ていいよ」と伝えないと来ないだろう。市役所内でも勉強している子どもは見かけない。

委員：市役所の新庁舎建替の際に、管理の視点からフリースペースの利用が禁じられたと記憶している。

委員：「なごみんはあと」は生涯学習課からの委託事業のため対象は中高生だが、親や先生ではない大人と話す機会は糧になる。安心安全な場所を提供することが大切である。

部会長：ボランティア活動センター前のロビーは子どもたちが利用しているが、特定の子が使っているようである。

委員：他市の市民活動センターでは、小学生と中高生が時間を分けて利用していた。受験に合格した報告に来てくれることもあり嬉しく感じた。

委員：かつての利用者が学生スタッフになり、長く続けることで成長する様子を見ることができ嬉しい。

委員：市民館を開放した取組を検討できるとよい。

【既存の地域活動を別の形で補完する活動】

委員：愛教大と地域の連携機会が増え、愛教大生が消防団に参加している。地域からも歓迎する声がある。

いきいきクラブがなくなっても集う場が必要だという事例でもあったが、なくなった地域活動を補完するしくみや機能が地域にはあるのではないかと。そうした情報を調査し、地区ごとでマッピングをしてもらえると、既存とは別の形で取り組む動きが見えてくる。それでも足りないところに補填を考えていくこともできる。

部会長：団体が消滅しても、やりたいと考える人は多くいる。団体を続けるだけでなく、新しい形での取組が生まれることも一つの方法である。

委員：変わっていくことも許容されていることが大切。誰かや何かのためと最初から決めるのではなく、「楽しいからやってみよう」と始まっていくものだと思う。

委員：防災分野で中学生が安否確認を担当することも考えられる。防災マップの inputs を手伝った中学生が、地域の高齢者と知り合い、気にかけてくれるような存在になった例もある。中高生は地域をよく把握しており、活躍が期待できる。

部会長：民生委員を中心に安否確認体制を取る地域は多いが、中学生が足で回って情報を集めるしかけはよい。

委員：中学生のモチベーションになること＝意味合いや楽しさを伝える工夫が必要である。

委員：地域の避難訓練のボランティア募集をした時に、参加が 2 人のみのこともあった。必要に迫られれば動けるが、「やってみたい」「おもしろそう」という好奇心が参加につながるため、「いつもの防災訓練のボランティア」という呼びかけ方ではなく、「マップをつくる」とか何か魅力がないと参加につながりにくい面はある。

委員：地区内の避難所で行う一斉訓練では、1 避難所あたり 10 人ほどボランティア参加がある。

委員：その場合は学校からの声のかけ方が参加に影響しているのかもしれない。

委員：最初は大人が整える必要がある。宝探しやマッピング等のように、楽しくみんなでまちを知るしくみがよい。ただし、初動は覚悟を持って大人が先頭を走り、土台をつくる必要はある。まずは「フェス」のような楽しい機会をつくり、そこに例えば防災であれば防災グッズ配布等の大人の思惑を盛り込む。ログを作るようなゲーム的な楽しさも重要。イベントのネーミングも「防災訓練」より「○○チャレンジ」のような楽しげなものが良い。

- 委員：「まちを知ろう」というキーワードは中学生も来てくれるように思う。
- 委員：出番を作るしかけや、アイデアを形にする初動は、大人が担う必要がある。
- 委員：「期間内にマンホールカードを集める」等のように、当日参加に限らず、期間を設けていつでも取り組めるような形にするとよい。コレクター心をくすぐるのもコツ。「おもしろい大人と出会う」機会にもなる。
- 委員：自分のタイミングやエリアで参加できる方法は、確かに活動しやすいと思う。

3. 今後の予定

(1) 第2回まちづくりん部会

令和9年1月21日（木）午前10時～11時30分 @刈谷市役所5階503会議室

(2) 第1回共存・協働のまちづくり推進委員会

10月14日（水）午後2時～ @刈谷市役所5階502会議室

以上